

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を  
診察するわけ

前回のコラムは多くの患者様に読んでいただき、面白かった、クリニックを身近に感じられたとの感想を頂きました。共通点があると人と人とは親しみを感じやすくなると言われております。最近では、受診される方も多く、ゆっくりと世間話をする事が出来ないのも難点です。このコラムを通じて私どもをご理解いただければと思います。

## 第二部

### 衝撃の停学処分と学生生活

第一部では幼少期過ごした福岡県久留米市の話、宇和島での中・高生活から防衛医大への進学を記しました。今回は、その後の楽しく、波乱に満ちた学生生活を中心に振り返ります。

父が自衛官で、陸上自衛隊という組織に関する漠然とした理解はあったものの、防衛医大での生活は私が想像していた大学活動とは全く異なるものでした。朝は6時に点呼ラッパで起床し、洗面、掃除、食事をしてから国旗掲揚と朝礼を強制されます。特別職国家公務員として授業に出席することは職務であり、授業をさぼることは業務拒否となるわけです。また同期として入学した中で私を含め現役入学者は2割程度。あと8割は浪人経験者でしたので、私には皆が大人びて見え、浪人生の方々には巧みに困難を乗り越えるものだと感心したものでした。母は私が防衛医大の授業についていけるか、なじめるか心配していましたが、慣れると寮生活は存外楽しいものでした。

課外活動としては、高校時代は学業に時間を割かれましたので、スポーツ関連の部活動への入部を考えておりました。当初、個人競技の柔道ではなく、少し経験のあったテニス部を考えておりましたが、勧誘時の高飛車な雰囲気には違和感を覚えました。一方、ラグビー部の先輩諸氏は、優しくかつ礼儀正しく(後にこれは罠であったことに気づいたのですが、時すでに遅し)、私をcheer upして、ラグビー部への入部(奴隷化)を勧奨しました。ラグビーなどほとんど知らない私は、基礎トレーニングからみっちりしごかれ、ランパス、ショートダッシュ、スクラム、タックルなど足腰が立たなくなるほどのしごきを受けました(これは後に後輩にも引継ぎ伝統となっております)。最初はフランカー、ロックなどのフォワードとしてプレーしましたが、怪我也多く、4年生以降はフルバックとしてバックスに転向しました。当時チームは関東医歯薬リーグに入ったばかり。下部組織からのプレーで

したので、80対10くらいのスコアで勝つのが大部分でした。ディフェンスの場面は少なく、楽しかったのを覚えています。

妻の雅代(当時大妻女子大生)と知り合ったのは19歳ごろです。私の誕生日(3月1日)の翌日(3月2日)が雅代の誕生日という奇遇もあり、かれこれ35年を経過したことになります。ラグビー以外にも防衛医大に在る間に経験できることはトライしようと、逗子でのヨット、朝霞駐屯地での乗馬、実家宇和島でのウインドサーフィンなどを楽しみ、油絵なども描いておりました。歴史物語が好きで、山岡荘八の徳川家康や司馬遼太郎の作品を読破しておりました。

好事魔多しと申しますが、防衛医大での生活に慣れてきたときに舎内飲酒(学生舎内での飲酒は不可)で見つかり、また首謀者(酒類を購入し持ち込み、後輩をけしかけて飲酒せしめた)ということで、停学2日の懲罰を受けることとなりました。それ以前にも、授業をさぼり教習所に行ったことで学校長訓戒も受けておりましたので、自分がしたこととは言え衝撃でした。停学期間中は授業には出れず(出勤停止みたいなものでしょうか)、一日反省文を書かされておりました。なにより残念だったのは、当時特別職国家公務員として給与を頂いておりましたが、賞与の中の勤勉手当がゼロになっており、支給額が半分になったことでした。



防医大卒業写真 亡き父母とともに

今回は、卒前・卒後のあらましを解説します。